

中村先生のいこと

山本 弘文（法政大学名誉教授）

大学の仕事で中村先生と頻繁にお会いすることになったのは、先生が総長に就任された一九六八年五月以降のことである。当時国内はベトナム反戦運動の高揚や原子力空母・潜水艦の寄港、成田空港用地の強制収用などの問題で、騒然とした状況にあった。そして、このようななかで各大学では、運動方針をめぐるセクト間の対立や、従来のも体制に対する反発なども加わって、激しい学闘紛争が始まっていた。法政大学でもこうしたなかで、前年三月に、最初の学内選挙で選任された渡辺総長が体調を崩し、六八年四月に辞任を余儀なくされた。その結果、渡辺総長のもとで学生部長を務めた私は、任期二年の後半を中村総長のもとで勤めることになったのである。

六八年度の法政大学は、学生セクト間の対立がさらにエスカレートし、夏休み明けの九月はじめには、正面玄関前で衝突を繰り返した。また小康状態の後も学生会館建設問題が浮上し、年末には五一一番教室で総長会見も行われた。私自身も総長とともに壇上で紙つぶてなどの標的になった。先生はその後も学費値上げや学生会館の管理運営問題、町田移転問題などをめぐる会見にしばしば出席し、学生たちに応対された。私もその後、学費値上げや学生会館問題などの会見に何度か陪席したが、先生の氣迫と強靱な精神力には、いつも感服するばかりであった。

先生との次の接点は、一九七二年五月の沖繩返還の年に行われた法政大学沖繩文化研究所の設立であった。七〇年前後に、『歴史評論』や『朝日ジャーナル』などに沖繩関係の小論や書評を執筆した関係からか、研究所発足の際先生から「君も所員に加わってくれ」と言われたのが始まりだった。そして翌年八月には研究所設立の挨拶のため、先

生のお供をして沖縄を訪れることになった。暑い盛りであったが、沖縄県をはじめとする関係機関への表敬訪問や、各界で活躍中の法政大学卒業生の集いなどへの出席を済ませた後、伊是名島や奥・安波など本島北部の探訪へとお供することができたのであった。

最後に忘れることのできないのは、七五年秋に先生ご夫妻をご案内したウィーンでの数日のことである。当時在外研究員としてウィーン大学日本学研究所に滞在していた私に法政大学から連絡があり、モスクワで行われる学長会議の帰路、ウィーン大学との交流のことで立寄りたいから宜しくとのことであった。宿泊は大学の近くのホテル・フランスとのことで、手許のメモによれば九月五日にお訪ねし、ウィーンの森の麓から葡萄畑を抜けてベートーベン・リンク（交響曲第六番パストラーレ第二楽章の小道）を降り、ハイリゲンシュタットの遺書で有名なベートーベン・ハウスやエロイカ・ガッセなどを散策したのであった。その時のご夫妻の安らかな笑顔の写真が、褪せもせず到手許のアルバムに残っている。その夜は国立オペラ劇場へご案内し、オセロを鑑賞した。一橋大学へ転出した良知力君も滞在中で、同席した。

先生のご冥福を改めて心よりお祈り申しあげらるしだいである。